Viator

VOL.32

2022 年聖ヴィアトール祭によせて

北白川教会主任司祭ウィリアム神父

聖ヴィアトール北白川教会の皆様、聖ヴィアトール祭おめでとうございます。

今年もまた、ヴィアトール共同体の守護聖人である聖ヴィアトールの記念日を祝います。

若きヴィアトールは、4 世紀にリヨンの教会で司教聖ユストゥスに仕えた読師であり侍者でした。ルイ・ケルブ神父は聖ヴィアトールに着想を得て「キリスト教の教義を教え、聖なる祭壇に奉仕する」ための団体を作り、「聖ヴィアトールの小教区聖職者ならびにカテキスタ」という名前をつけました。これにはケルブ神父の意図が反映されています。この団体は現在では、聖ヴィアトール修道会になっています。

ルイ・ケルブ神父は、ヴィアトール会員と協力者が、霊的生活を支え、日々の仕事に意味を与える二つの基本軸、すなわち神の言葉を聞き黙想をすること、聖体祭儀の二つを宣教の方針とすることを望みました。神の言葉と御聖体は私たちのアイデンティティを構成するふたつの要素であり、宣教を導き、その糧となるものです。

そして、私たちは神の子として愛され、神の国を築くために協力者として選ばれていることを、喜びをもって知っているのです。

ご存知のように、2019 年 10 月 2 日に教皇フランシスコは、ケルブ神父を尊者として宣言しました。これは、ケルブ神父の対神徳、枢要徳、敬虔の徳の経験が英雄的な段階にあると認め、ケルブ神父が列福に近づいていることを意味するものです。ケルブ神父の執り成しを祈り求めましょう。

聖ヴィアトール祭が、私たち聖ヴィアトール北白川教会のメンバー全員の友情と兄弟愛の絆を強めるものでありますように。

あらためて、聖ヴィアトール祭が楽しく祝福に満ちたものであることをお祈りいたします。聖ヴィアトール北白川教会と京都教区での宣教にあたってヴィアトール共同体の使命を果たすために、皆様が行っているすべてのことに感謝いたします。皆さんの福音への証しによって、尊者ケルブ神父の創立のビジョンに生命とエネルギーが吹き込まれるのです。皆さんの上に神の祝福が降り注ぎますように。

シノドス「ともに歩む教会のため－交わり、参加、そして宣教」

マリア M.K.

2021 年 10 月、世界代表司教会議（シノドス）第 16 回通常総会の開幕ミサが、教皇フランシスコの司式により行われた。

今回のテーマは「ともに歩む[=シノドス的]教会のため―交わり、参加、そして宣教」である。従来のような司教だけの会議ではなく、聖職者、修道者、そして信徒がどのような経験をし、どのように霊的に導かれているかという声を世界中から集めるものだ。

ギリシャ語の「シン（ともに）」と「ホドス（道）」が合成された「シノドス」という語は「ともに歩む」という意味があり、「シノダリティ」とはともに歩むこと、ともに歩むあり方を指す。

シノダリティが表す主な原則は「準備文書」に描かれている*注。それはカトリック中央協議会により次のようにまとめられている*注。

・霊の呼びかけを思い起こす
・すべての人の声を聞く。参加型の教会プロセスを生きる
・カリスマの多様性を認識する
・福音宣教のための参加型の方法を見つける
・反福音的な動きを見極める
・社会の癒しや和解のために信頼できる教会となる
・キリスト教諸派、他の宗教、市民団体との連携を強める
・教会内のシノドス的な動きを促進する

全国の信徒の声を、小教区→ブロック→教区という流れで集約し、今年 8 月日本の回答書が提出された*注。

これに先立ち、当教会でも、コロナ禍のため大勢で集まる機会が得られない中、部会ごとにメールやラインを活用し、改善すべき点として以下の意見が寄せられた。

・信徒間の交流をはかる
・参加したくなる学びの場を作る
・初めて教会に来た人が、また来たくなるような仕組みを作る
・教会を居心地のよい場所にする
・ミサを捧げるという義務を再確認する
・ミサ以外の祈りや分かち合いの機会を増やす
・世代別や地域別のグループ作りなどにより、教会の中にみんなの居場所があるようにする
・中高生の LINE グループを作り密に連絡を取り合う
・少子高齢化で疲弊してしまわないよう、色んな面で簡素化を検討する
・広い視野で広報活動を考える

また洛北ブロックとしてまとめられたものの中には、

・教会に来られない人（高齢や病気、受験勉強や部活で多忙な学生など）への対応が不十分である
・コロナ禍で教会に行かないことに慣れてしまい、コロナ後に行けるか不安

などがあり、これらも当教会にも当てはまると思われる。

先日京都教区の「役員交流会」が開催されたが、そこで大塚司教様は、意見を出すことのできなかった人の声をどう拾い上げるかが課題だと指摘された。また日本の中でカトリック信者は少数派であることを自覚し、ともに歩むための霊的サポーターの養成が急務であり、信仰共同体の絆を深めつつ続けていく強い意志が必要と述べられた。

そして共同体作りに必要なこととして、

・語る教会から聞く教会への転換
・外国人信者との共働
・祝うことを実感できるミサの実施
・ともに歩むべき人は、助けを必要とする人であるとの認識

などをご教示くださった。

また一場神父様は「教会を信じる」ことが大切だと強調された。それはつまり同じ洗礼を受けて、聖霊が働く仲間である信徒同士が信頼し合うことであり、ひいては神様を信じるということである。理想の教会などというものはなく、今いる教会が全てであり、お互いに素晴らしいところ、良いところ（=神のはたらき）を見つけて分かち合っていこうと励ましてくださった。

私たちも「ともに歩む」仲間として信頼を培っていけるよう努力し、またお互いに祈りたいと思う。

*注 いずれもカトリック中央協議会のサイトに掲載されている。各ページの QR コードは以下の通り。

ルワンダのカトリック教会

カブガイ大聖堂

キベホの聖母聖堂

H.D.

アフリカ宣教師修道会（ホワイト・ファーザーズ）所属の宣教師たちがキリスト教をルワンダに伝えたのは、1900 年頃でした。それとともに、カトリック教会がこの国に大きな影響を及ぼし、ルワンダ国民はカトリックに改宗しました。キリスト教の宣教が始まって 50 年足らずの間に、ルワンダはキリスト教国になりました。

しかし、カトリックが広まる前に、ルワンダ人は、昔からこの国にある原始宗教を信仰し、「イマーナ」という神を崇拝していました。この国で子供に付ける名前にも、この偉大な神「イマーナ」の影響が根強く見られます。たとえば、「ハレリマーナ」は「教育者の神」、「トイゼリマーナ」は「神を信仰します」、「ヌクンデ

ィマーナ」は「神を愛します」という意味です。

教皇レオ 12 世の指導のもと、ラヴィジェリー枢機卿が 1868 年に創設したアフリカ宣教師修道会によって、アフリカの赤道地域では宣教が広がっていきました。ルワンダも、その一部となりました。1900 年にルワンダに来た最初の三つの修道会がサヴェに本拠を置き、この地は、この国で最初にイエスの聖心に対する崇敬を示す場所となりました。その後、1917 年にはヒルト司教が最初のルワンダ人の二人の司祭を任命しました。ザザ出身のバルタザール・ガフクとサヴェ出身のドーナット・レベラホです。

2001 年には、オーガスティン・ミサゴ司教が、ルワンダへの教皇特使の臨席のもと、キコンゴロのカトリック聖堂にまつわる以下の出来事が真実であることを宣言しました。1981 年にキベホで聖母マリアが現れたとの出来事です。これによってマリアの出現の真実性が公式に認められることとなりました。2020 年は、ルワンダのカトリック教会にとって特筆すべき年でした。アントワヌ・カンバンダ大司教が枢機卿に選任されたのです。ルワンダ司教協議会会長のフィリップ・ルカンバ師によれば、この選出は、バチカンとルワンダ政府との間に良好な関係をもたらすこととなる、ということです。

現在も、ルワンダの宗教の大多数はカトリックですが、1994 年のツチ族虐殺の後は一時的に減少しました。和解が進むとともに、ルワンダのカトリック教会は、教育・慈善事業（カリタス）・福祉など、非常に重要な影響を社会に及ぼしています。

西坂巡礼

ローザ・セシリア C.T.

ルドビコ様は 12 才
耳をそがれて　しばられて
歩む千キロ　雪の道
小さい足跡　血が滲む

ルドビコ様が　にっこりと
笑って槍を受けた時
西坂丘の夕映に
ホロリと散った　梅の花

ご存知の永井隆博士による歌詞です。この歌詞に詠われたルドビコ茨木は、日本 26 聖人で最年少の殉教者でした。このように讃えられた、わずか１２歳のルドビコが憧れを持って死を抱き締めた場所、西坂。

訪れてみると、そこはなんの変哲もなく、静かで、日常に溶け込む風景でした。もし、近くに住んだなら毎日通り過ぎるような場所でした。一つ違う事をあげるなら、静かであればこそ荘厳さが際立ち、オルガンが聞こえるようでした。

「手を広げているのが、司祭です」と、付き添ってくれた神父様は静かさを壊さないように語られました。

天に還ってなお、地上の瑣末さに左右されるわたしたちを救い上げてくれるような錯覚に陥りました。

この６月、息子の、青春の陽炎のような儚い希望に付き合って長崎を訪れたと思っていましたが、実は招かれたのはわたしかも知れない。西坂を訪れ、そう感じました。

京都に帰れば、コロナとの戦いが激しさを増している場所で、鎧を纏わなければならないことを知っていたので、その静かな佇まいは純度の高い一雫の清涼剤のように胸に染み渡りました。この６月の長崎訪問は、日常の小さな出来事を積み重ねること―それを愛おしく感じることを再認識させられました。自身の使徒職はますます愛おし

く、息子の歩む道もわたしの願いとおりではなく、本当に神に息子を捧げたという意味を受け入れる訪問となりました。それは西坂に佇む静かで、日常に神をもたらしていた聖人たちが教えてくれたことでした。今もなお、天国で働いてくださっていることに感謝します。

最後に時間を割き、付き添ってくださった神父様に感謝申し上げます。

なぜ学ぶか？

セシリア E.O.

高校から大学、さらに大学院に進み専門性があがるにつれ「この勉強は何のためにあるのだろう」と考えることが増えました。せっかく与えていただいている勉強の機会ですし、学べば学ぶほどより深く物事を味わえるという良いところはあります。ただ、自分の喜びとは別に、何か他人との共生や社会のために何か役立つのだろうかと考えると言葉に詰まってしまうのです。

国語や文学研究はことに実用性が低いと指摘されますが、他の分野においても「なぜ学ぶか？」が問われ続けていると思います。

私は国語が好きな一方、数学がとても苦手で数学に対しては「日常生活である程度必要である」以外に学ぶ理由を見いだせませんでした。納得する理由を見いだせなかったために学習が苦痛になったのだと思います。私のように苦手な教科があり、「なぜ学ぶか？」に納得できる理由が見いだせない生徒に対して、どう語り掛ければよいか。

一向に解決できなかったこの課題に、光を与えてくれたのは高校の恩師でした。数学の先生でしたが、わかりやすい説明を組み立てる考え方は、数学でどの式をどんな順番で組み立てるのかを考えるのと似ているのだ、と会話の中でふとおっしゃいました。わかりやすい説明は人と会話するのにあった方がいいでしょう、説明力を鍛えるために数学でトレーニングしているんです、という先生のお言葉に私は納得しました。それぞれの教科でどんなスキルを養っているかという視点はまったく新鮮でした。国語ではどんなスキルを養うのでしょうか。

私は、「ことばの意味を人と共有する」スキルだと思います。例えば「芸術的」だという言葉を誰かへの批評として使ったとき、最高の誉め言葉と感じる人もいれば、少し馬鹿にしたようなニュアンスを感じる人もいます。発信者側の意図に関係なく、受け手の言葉の解釈によって、発信内容の意味が大きくブレてしまうのです（ＳＮＳでのトラブルはこうしたところからよく起こります)。このブレをなくすために、ことばの研究があります。「芸術的」という言葉の成立した過程や使用例を研究し、その上で適切だと定義していく。出された定義に対して批判が出て議論が始まり、ある程度皆の納得する定義ができあがります。そこでやっと、その議論の場にいた人の間で、「芸術的」ということばは共通の意味をもつ言葉になります。

同じ言語を使っている人同士でも、個々の環境によって言葉の解釈は違います。褒めたつもりが傷つけてしまったり、軽いおふざけで言ったことが後で大問題になったり、ことばは場や人によって変わります。おなじ意味で言葉を話す、ということはとても難しいことです。辞書は私たちが言葉の解釈を近づける仲介をしてくれますが、解釈を近づける努力をしなければ辞

書には何もできません。この努力を促すのが、国語という教科であり国語の先生であると思います。国語の授業で人物の心情を文章から読み取ったり傍線部の意味を考えることで、ことばを共有するトレーニングをしているのです。

私は今このように考えていますが、じっさいに「なぜ学ぶか？」と訊かれるとまだまだひるんでしまいます。人に何かを教えたり自分の専攻を説明したりするたび、大学の教授がちらほらとおっしゃっていた「その研究は何に役に立つか、と訊かれたときに答えられるようにいつも考えている」という言葉がいつも頭に浮かびます。教育以外の場でも、人と話をする限り、「なぜ学ぶか？」という問いにひるみ、考え続けなければいけないのだと思っています。

✝✝

編集後記

当教会の守護聖人であり、当教会の司牧を担当する修道会の守護聖人である聖ヴィアトール。彼は一人で聖人であるのではない。彼と切り離せない聖人がいる。聖ユストゥスだ。

ユストゥスは司教だった。司教と言うと、私たちが知っているのは、特別な儀式やお祝いのミサの時に教会にやってきて、ミサの司式をし説教をする。姿を見せないときには、仲間の司教たちと集まって日本の教会のことを決めたり、時にはバチカンに行って日本のことを教皇に報告したりもするようだ。

ユストゥスは四世紀のフランスのリヨンの司教だった。公会議にも出かけたようだ。けれども、そういう教区長としての業績を評価されて聖人になったわけではない。ユストゥスが聖人になったのは逆に司教を辞めたからとも言える。ユストゥスに責任はなかったのに、ある事件の責任をとって辞めて、砂漠に行って、禁欲生活を送り、亡くなった。だから、聖人として崇拝されるようになったのだ。

ヴィアトールは、ユストゥスの手伝いをしていた。ユストゥスが司教を辞めたとき、新しく司教になる人の手伝いをしてもよかっただろう。けれども、そうはせずに、ユストゥスを追いかけた。いっしょに砂漠に行って、いっしょに祈り、ユストゥスが死ぬと、後を追うように亡くなった。ユストゥスよりずっと若かったのに。そして、ユストゥスといっしょに聖人として崇拝されるようになった。

私は、この教会の誰よりもヴィアトールに近いかもしれないと思えた頃があった。けれど、聖ヴィアトールのような人にはなりそこねたようだ。

もちろんベリーニ神父様は司教ではなかったが、司教だったとしてもおかしくはないとある頃から思うようになった。それをご本人に言っても「私はそのタイプじゃない」と返されたが。神父様は、本物の砂漠に行かれたわけではないが、砂漠のような状況におられた。そんな神父様のお手伝いをすることで、私は聖ヴィアトールの気分を味わったのだ。

ベリーニ神父様は帰天され、私はまだ生きている。聖ヴィアトールのような聖人にはなりそこねた。でも、気を落とすことはない。この教会はカトリックの教会であり、カトリックには数多くの聖人がいる。諸聖人の祭日もまもなくだ。

（マリア・ヨハンナ M.M.）

カトリック聖ヴィアトール北白川教会　2022 年 10 月 16 日発行
ホームページ：https://www.stviator-kcc.org/